EDO-TOKYO MUSEUM 江戸東京博物館

EDO-TOMO えど友

えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

第69号
平成24年
(2012)
9 － 10

江戸東京博物館友の会会報

目次

東京駅丸の内駅舎の復原完成間近……1～2
新役員紹介……2
えど友広小路……3～5
会員に聞く「浅草寺全おみくじ収集家 篠山慶次郎さん」/ 会員からの投稿「小岩から柴又まで」「上野と私」、「新宿　市ヶ谷　本塩町」/ えど友サークルだより / えど友サークル紹介「藩史研究会」/ 友の会めも
友の会セミナー「忘れられた幕末の偉人―小栗上野介」…6
友の会セミナー「三猿のみた江戸」……7
友の会特別観覧会「二条城展」……8
江戸博クリップ「日韓美術交流史をテーマに」……8
見学会「『江戸名所図会』を中心に―その1湯島・本郷」…9
江戸名所図会を歩く…③［於玉稲荷から吉原町旧地］…10
催事案内／会員優待のお知らせ……11～12

東京駅丸の内駅舎の復原完成間近

今年は、既に開業した東京スカイツリーと並んで赤れんが駅舎ともいわれている東京駅丸の内駅舎の復原完成が注目されています。この丸の内駅舎は、現在、工事用の足場が撤去され、戦災で焼失したドームと3階部も含めて創建当時の外観に復原された姿を見ることができます。丸の内駅舎について、調べてみました。丸の内駅舎は、「東京駅丸ノ内本屋」として平成15年(2003)に国の重要文化財(建造物)として指定されています。

東京駅の誕生

明治5年(1872)に新橋－横浜間で官設の鉄道が、明治16年(1883)には、私鉄の日本鉄道が上野－熊谷間をそれぞれ開通しました。

このため新橋と上野の間を鉄道でつなげる必要がでてきました。明治22年(1889)に中央停車場(開業前の東京駅の名称)を三菱ケ原と呼ばれていた丸の内に設ける計画が東京市区改正調査会で決定しました。また、翌年には鉄道庁が新橋－上野間高架鉄道計画のための調査を始めました。

▲復原工事以前の丸の内駅舎

▲かつての丸の内駅舎絵はがき

駅の基本的な形式として、頭端式(行き止まり式)と通過式があります。頭端式は、上野駅がその代表例で、ヨーロッパの多くの大都市の中央駅は、この形式になっています。しかし、効率などを考慮して中央停車場は、通過式を採用しました。

政府は、ドイツから技術顧問としてフランツ・バルツァーを招聘(しょうへい)しました。バルツァーは、れんが造りの市街高架線の設計・施工の指導を行い、また、中央停車場の基本設計、和風の瓦屋根を取り入れた駅舎も設計しました。しかし、この駅舎の案は、受け入れられませんでした。

明治36年(1903)に中央停車場の建設が公示されました。この年、バルツァーが任期満了により帰国したため、辰野金吾に設計が引き継がれました。辰野は、日本銀行本店、赤れんがの万世橋駅舎(現在は廃止駅)などを設計した建築家です。辰野は、駅の基本的な設計についてはバルツァー案をそのまま採用し、駅舎は鉄筋赤れんが造りのルネサンス様式に変更しました。大正3年(1914)に中央停車場が竣工し、「東京駅」と命名されて開業しました。

開業から昭和23年(1948)までは、正面に皇室専用玄関を設け、正面向かって右手の南ドームは乗車口、北ドームは降車口となっていました。

東京駅開業の翌年、東京ステーションホテルが開業し、大正12年(1923)の関東大震災では、数々のホテルが倒壊・焼失するなかで、多くの避難者を受け入れました。

▲復原されたレリーフ

復原工事について

駅舎の復原工事の概要は、次のとおりです。

・現存している駅舎の外壁など主要部分を可能な限り保存・活用し、創建当時の姿に復原
・戦災時に焼失した屋根と３階の外壁を新たに復原
・駐車場、機械室などを設けるため、地下１、２階を新設
・南北ドーム内部の見上げ部分を写真や文献資料などをもとに復原
・駅舎の耐震性能向上のため、免震構造を採用

工事は、平成19年(2007)に着工しました。駅の機能を残したままの状態で工事を進めるため、大変なご苦労があったようです。

創建時の駅舎の基礎に松の杭が1万本も打たれていました。それによって駅舎を支え、関東大震災でも駅舎には被害はありませんでした。復原工事では、松杭に代わって約450本の新しい杭を打ち、免震ゴム装置352台とオイルダンパー(緩衝材)158台を設置して耐震性をさらに強化しました。

復原完成後の駅舎

10月には海外からの旅行者のためのサービスセンターが開業、ステーションギャラリー、東京ステーションホテルが再開します。

さらに、日没から21時まで(予定)の時間、LED照明によるライトアップも始まります。

駅舎の見どころ

南北ドームの内側およびレリーフは、当時の写真・図面・文献を基に、創建当時の姿に復原しています。

① 花飾りレリーフ

ドーム天井の中心飾りの周囲にある花飾りレリーフはクレマチスの模様で、南北のドームにそれぞれ16点ずつ配置されています。

② 鷲型のレリーフ

８角形のドーム天井のそれぞれの角にある鷲(わし)のレリーフは両翼間が約2.1ｍにもなり、南北のドームにそれぞれ配置されています。

③ 干支のレリーフ

ドーム壁の８カ所の角にある彫刻レリーフで、それぞれの干支(えと)が示す方位に従って十二支のうち丑(北北東)、寅(東北東)、辰(東南東)、巳(南南東)、未(南南西)、申(西南西)、戌(西北西)、亥(北北西)の八支が配置されています。

南ドーム、北ドームとも１階部分は駅のコンコース(中央ホール)になっているので、そこからドーム内側を見ることができます。また北ドームに隣接している東京ステーションギャラリーの２階にドームの天井を眺められる開放的な回廊ができるので、ここからレリーフなどがよく見られるようです。

参考資料
『東京駅と辰野金吾　駅舎の成り立ちと東京駅のできるまで』(東日本旅客鉄道株式会社)
『最先端技術で未来へ継承～東京駅地下の免震化に隠されたプロセスと苦労～』(KAJIMA ダイジェスト201203)
『東京駅丸の内駅舎保存・復原工事及び八重洲口開発第２期工事について』(東日本旅客鉄道株式会社プレスリリース2011年9月6日)

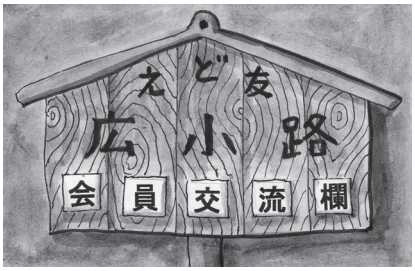
【取材】文：広報部会・前田太門

新役員紹介
(私のプロフィール)

＊５月26日開催の第12回定期総会で選出された新役員のプロフィールをご紹介します。よろしくご支援願います。
(イラストは会員の藤井文乃さん)

事務局長　大澤憲一

今年２月、事務局長だった末永さんが一身上の都合により辞任され、急遽事務局長を引き受けることになりました。他の役員の方々の協力をいただきながら、少しでも友の会のお役に立てればと思っております。４年前に友の会に入会、ほぼ同時に事業部会に入りました。以来、江戸が大好きな皆さんと楽しく過ごしてきました。今年の３月で完全に現役を引退しましたので、これから気合をいれてさらに「江戸を楽しもう」と思っています。



会員に聞く

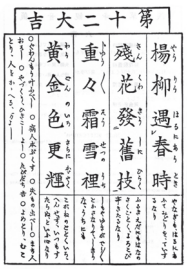
浅草寺全おみくじ収集家 篠山慶次郎さん

友の会のどんな催し物でもよくお見かけするのが篠山さんです。会の発足当時から会員として会の成長を見守り続け、それに先だつ江戸博開館に当たっては開館記念の「日本橋渡り初め」をなさった数少ないお一人でもあります。

――浅草寺おみくじ収集のきっかけは？

運がいいのか、自宅から江戸博へのルートの真ん中が浅草で、シルバーパスで浅草乗り換えです。それで浅草寺を行き帰り通ります。手を合わせお賽銭代わりにおみくじを買い、違う数字を引いているうちに100番まで全100枚揃えたくなりました。境内には堂内の2箇所を含め「みくじ」台が7台あり、顔なじみの雲水さんもいろいろ教えてくれます。

浅草寺おみくじの特徴ですが、普通より大判で見やすく、紙質は薄いですが丈夫な和紙です。表は漢文と訓読文と意訳で、古文書の勉強にもなる字体には流儀があり古文書の先生も読めないのもあります(なお裏は現代語訳と英文)。古文書の先生に差し上げようとしたら寄贈品窓口の学芸員のお耳に入り、館に寄贈ということになりました(昨年の「市民からのおくりもの展」に展示)。



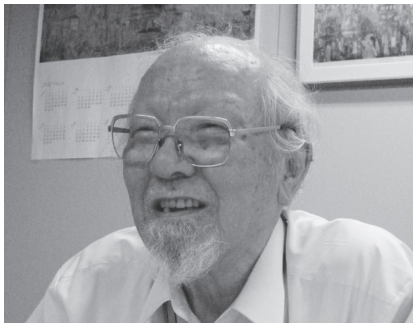
▲浅草寺のおみくじの例

――何年で全100枚が集まりましたか

約7年ですね。同じ番号であれば記載内容は同じです。凶から大吉まで100通りですから100枚あります。異なる番号を引くとは限らないので、1番から100番まで何セットかが同時期にそろいます。江戸博に寄贈した以外に間もなくさらに2セットそろいます。これからも浅草寺参り(と江戸博通い)は続けたいと思います。

――座右の銘は

「教育は人なり」です。たとえば私が催し物で最前列に席をとるのは先生の人柄にじかに触れたいからです。気迫、意気込み、目の色、それらを身近に感じ取りたいのです。江戸博の看板と思う「ミュージアムトーク」にも参加しますが、学芸員が交代で常設展のワンポイント解説をします。ここでも学芸員の生きざまに触れることができます。



▲篠山慶次郎さん

江戸博の学芸員の中には他の博物館や施設、大学に異動された方、今も江戸博を支えているベテランの方等がおられます。本当に組織の財産は人だと思います。人が育つことは育てられることでもありますし、そのために私も自分なりに応援していきたいのです。

【付記】「ミュージアムトーク」は毎週金曜日16時から30分間程度行われ、『江戸博NEWS』の「催し物のご案内」に予定(月日、テーマ)が掲載されています。

【聞き手】文：広報部会・内匠屋京子
写真：同・中村貞子

会員からの投稿

小岩から柴又まで

大谷昌三

江戸川区小岩と葛飾区柴又は隣町同士です。千葉県との境を流れる江戸川の土手を毎朝散歩するのが私の日課。京成電鉄の「江戸川」駅の近くから土手に上がり、柴又の寅さん公園まで片道約5千歩、往復で1時間半程の行程です。

土手に上がると眼下に小岩菖蒲園があり、菖蒲が主体なのはもちろんですが、コスモスなどその季節の花々も植えられるので1年中楽しむことができます。河川敷には野球、サッカー、ラグビーなどのグランドが整備され、トイレも何カ所もあるので便利です。

対岸の千葉県側はゆったりとした下総台地が広がり、ここには里見公園はじめいくつかの学校、病院等が森の中に点在しています。里見公園にはかつて小岩に住んだ北原白秋の旧居「紫烟草舎」が移築されて、在りし日の文豪の姿が垣間見えます。

江戸川のこの辺りは天文7年(1538)、里見と北条の軍勢が戦った古戦場でもあり、また天明3年(1783)、浅間山の大噴火で犠牲になった人の遺体が流れ着き、地元の人たちが手厚く葬った場所と伝えられています。

左手にスカイツリーの勇姿を望みながら、ゆるやかに蛇行している土手を進むとやがて北総線の鉄橋、ガードをくぐるとまもなく寅さん公園です。川岸には災害時の緊急物資の輸送用の船着き場が設けられ、その上流が矢切の渡し場、100円なりを奮発して船に乗れば10分程で対岸、ここからゴルフ場の中を抜け、土手を越えて畑の小道を20分程で野菊の墓の文学碑が建立されている西蓮寺へ到着します。伊藤左千夫の『野菊の墓』の一節を読んで、政夫と民子の幼い恋をしのぶことができます。

ここまで足を延ばさなくても、寅

さん記念館を見たり、帝釈天をお参りしたあと参道を歩けば、草だんごやせんべい、あめなどの店が並び、おなかが空いたら川魚料理店が何軒もありますので、酒食を楽しんでください。

ちなみに帝釈天は「経栄山題経寺」といい、日蓮宗のお寺です。本尊は日蓮聖人が刻んだと伝えられている帝釈天の板碑「板本尊」と呼ばれるものです。境内には「瑞龍の松」が枝を広げ、湧き出ている水は「御神水」として親しまれています。

柴又から金町、小岩方面へバスの便があり、京成電鉄の「柴又」駅から「高砂」駅を経て都心へは一直線です。たまには都心の喧騒を離れて郊外へ出てみませんか。なお、土手の上から冬の日など天気がよければ、富士山、筑波山を望めます。ご幸運を……。

上野と私

福　山　恵　子

地方出身者の私は、ＪＲ「上野」駅公園口から降りて博物館に行きます。何度か行くうちに場所として上野寛永寺を知りました。天海の作った寺だということもよくわかっていません。増上寺も徳川家の寺で二カ所なのか？　どちらも戦争で形を変えてしまったようです。寛永寺は幕末にも痛みを持ったようですが、日本史によってわずかに知るだけです。

現在、私たちが日常目にする上野公園の景色は寛永寺がもとでできた、と思われます。寺の形がわずかに残っています。動物園のなかに塔があったり、大仏がいたり、寺の門もあります。

公園として現代的に美しく見せるのも大事です。美術館、動物園、博物館など文化の中心である上野ということも大事です。

林だった場所にビルが建ち一階が商店になる、自然なことだといえます。

私が動物園に行ったのは10歳の頃で、今50代になりました。20代後半から、年に3回ほど足をはこぶという生活を送っていました。

それほど短い間でも、上野はずいぶんと形を変えています。世の中は形をつねに変えていくものだ、と考えています。

『えど友』に、「楽しみな上野の山の化粧直し」という記事がありました。何回か行ったときに、工事をしているのでこのことだと思いました。

書くことに迷いはありましたが、私はごく一般的な歴史好きのおばさんですから、ただのたわごとだ、と受けとめてもらえば十分だと思っています。

江戸文化を残しながら、美しい街なみを自然な形で後世に残してほしい、東京には古い建物や文化が残っているのでそれを残してほしい…と考えています。

新宿　市ヶ谷　本塩町

桐　井　聰　男

新宿区本塩町はＪＲ市ヶ谷駅の近くにあるまことに小さな町である。そしてまことに古い町で歴史の町である。都心の中央にあって、生活に最も関与している「塩」という文字が付いているのは何故であろう。少しその町を調べてみると、昭和18年(1943)に本村町、七軒町、もとの塩町一丁町とあわせて成立した町であり、「本」と「塩」とをとったもので、合成町名のはしりである。七軒町は「四谷七軒町」と称され、元和年間(1620年頃)に既に複数の家があったという。この人々がこの辺りを開発したものであろう。古い地名も、伊賀、尾張という人名も残っている。「塩町」はこのために消失してしまったが、江戸時代から称せられていた地名である。

徳川家康の入府以来、佐久間某や馬込氏に寛永15年(1638)に支給された豊島郡四谷村の原野であった。そして彼らがそれまで住んでいた現在の中央区大伝馬塩町にちなんで、四谷塩町と命名された。この町も昭和7年(1932)に消滅している。

塩は私達の生活に欠くことのできないものであるが、今は「イオン交換樹脂膜」というものを利用して海水から工業的に生産され、全国にあまねく流通し、入手に苦しむことはなくなった。その前には塩はどのように運ばれたのであろうか。全国的な塩の道は別として江戸、東京へはどのように運ばれたのであろうか。江戸の塩の主な生産地は浦安と船橋であった。浦安で生産された塩の運搬手段は、馬や牛はもちろんだが、船が主役だったであろう。江戸川、新中川、旧中川から古川、新川を経て小名木川、それから隅田川を横切り、神田川あたりで荷を解き、片道は終了したのであろう。帰路は原野に近い内藤町、大久保、落合あたりから蔬菜類を積んで商いをしたはずである。

浦安には「塩」のつく地名が多いが、地名の変更で市川市に塩浜、塩焼という地名が残り、船橋市には潮見町があり、都内江東区でも潮見、塩浜という各地域がある。少し離れるが埼玉にそのままの八潮市はおそらく古東京湾の名残を意味しているのであろう。

もちろん全国には多くの「塩」あるいはこれに推定できる地名があり、そこに人々の生活が見えてくるのである。

えど友 サークルだより

◆江戸東京を巡る会：6月17日(日)「堀と川跡をたどる歴史の足跡　龍閑川跡暗渠を歩く」と題して、東京駅に集合、呉服橋から龍閑橋跡などを経て堀留あたりまで江戸の名残りを訪ねた。参加者は35人。

◆落語と講談を楽しむ会：6月18日(月)田中文彬さんが月番で、CDによる「艶笑小噺特集」。ストレートあるいはソフトな表現に適度なくすぐりを加えた多くの小噺を、米朝、先代小さん、先代金馬、初代三亀松、松鶴、円生など名人と呼ばれる落語家、芸人の達者な芸を鑑賞した。参加者22人。7月24日(火)武田夏男さんの月番で、DVD鑑賞「人間国宝競

演」。米朝の「天狗裁き」と「はてなの茶碗」、先代小さんの「道具屋」と「試し酒」、貞水の「番町皿屋敷」とそれぞれ円熟した芸を楽しんだ。参加者18人。

◆藩史研究会：6月8日(金)山我正明さんが「越後新発田藩」の研究発表を行った。外様大名にもかかわらず溝口氏の新発田藩支配は幕末まで続いたが、初代秀勝から十二代直正までの治績をいくつかの事件をまじえ、ていねいにたどった発表で、一同興味深く聞いた。参加者は18人。7月13日(金)清水昌紘さんが「松本藩」の研究発表を行った。松本藩歴代7家の出自や系譜、治績にエピソードをまじえた詳細な内容で、一同を引きずり込んでの熱のこもった発表だった。参加者19人。

◆古文書で『八犬実記』を読む会：6月14日(木)、29日(金)、7月12日(木)、27日(金)に例会を開催。参加者は各9、9、8、9人。

◆神田川を歩き楽しむ会：6月24日(日)と28日(木)に第30回として、小石川橋から水道橋まで歩いた。途中、小石川後楽園(神田上水跡)、こんにゃくえんま・源覚寺、講道館・柔道資料館、川上座跡、東京座跡、講武所跡、カトリック神田教会聖堂、神田上水掛樋跡、三崎座跡、三崎稲荷神社などを参拝あるいは見学した。参加者は各38人、53人。7月29日(日)に第31回として、「船による日本橋川、神田川めぐり」を行なった。今回は暑い時期なので歩くのを止め、船を借り切って川面から江戸東京を見学した。コースは日本橋船着場から日本橋川を上り、神田川へ出てこれを下り、隅田川へ出てこれを下り、豊海橋のところから日本橋川へ入り、これを上って日本橋に戻るもの。一同しばしの船旅を楽しんだ。参加者は59人。

◆『江戸名所図会』輪読会：6月18日(月)山本京子さんの担当で、日吉山王神社から千手観世音(心法寺)までを読み、神社や地名の由来などについていろいろと話し合った。参加者23人。7月16日(月)中川博允さんの担当で、清水坂から麻布善福寺までを読み、活発な討議が行われた。参加者20人。

＊　＊　＊　＊

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しています。奮ってご参加ください(ただし、輪読系の2サークルと「落語と講談を楽しむ会」については定員に欠員が出たときに先着順で参加いただくことになります)。参加ご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名をご記入の上、友の会事務局へお申込みください。また**新しいサークルの立ち上げ**を希望の方は友の会事務局へお問い合わせください。

申込・問合せ先
130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局
Tel.03-3626-9910

えど友 サークル紹介

藩史研究会

シリーズ3回目に紹介するサークルは平成17年(2005)7月から活動している「藩史研究会」です。江戸時代にあった全国の藩の歴史を研究発表し、それぞれの藩ゆかりの近郊の菩提寺や史蹟を巡るツアーを行っています。現在会員は31名とのことです。

7月13日第84回の例会を見せていただきました。14時より清水昌紘さんの担当で、盛りだくさんのレジュメを基に「信濃松本藩」の研究発表が行われました。

発表者は自分の興味ある藩を選択登録(エントリー)し、研究し順次発表する形で行われています。今回は研究内容を22ページのレジュメにまとめられて、信濃国の地理的状況を長野県歌と地図で説明。石川氏、小笠原氏、戸田氏、堀田氏、水野氏など歴代藩主を系図やエピソードをまじえて紹介し、国宝松本城は古地図や写真、藩邸は江戸切り絵図で、菩提寺は表にまとめられ、5分の休憩をはさんで2時間研究発表が行われました。その後も質問や感想、観光地の紹介もあり、和やかに16時20分過ぎに会が終了しました。

▲研究発表会の様子

聞いているだけでも興味の尽きない発表でしたが、個人的には出身県にある藩に興味があっても、どのように何を調べたら満足できる知識につながる研究発表をすることができるのか分かりませんでしたが、具体的方法を教えてもらい充実した時間となりました。

当面例会100回を目指して、全員で頑張って行きたいとのことです。

【取材】文：広報部会・佐藤美代子
写真：同・竹中裕見子

友の会めも(開催日と人数)
平成24年6月～7月

◆役員会6月12日(火)14人。7月10日(火)14人。◆事業部会6月5日(火)21人。7月3日(火)21人。◆広報部会6月19日(火)14人。7月17日(火)13人。◆総務部会6月26日(火)19人。29日(金)9人。7月24日(火)20人。◆文政町方書上翻刻プロジェクト6月7日(木)A10人、B9人。6月21日(木)A10人、B10人。7月5日(木)A10人、B9人。7月19日(木)A10人、B10人。

◆古文書講座　入門編6月6日(水)午前80人・午後53人。7月4日(水)午前76人・午後57人。初級編6月20日(水)午前42人・午後37人。7月18日(水)午前50人・午後41人。中級編6月16日(土)午前45人・午後23人。7月21日(土)午前40人・午後22人。

第 118 回　江戸東京博物館友の会セミナー（平成 24 年 6 月 23 日）

「忘れられた幕末の偉人 ―小栗上野介」

講師　福田嘉文さん（歴史研究家）

本日は「小栗上野介（おぐりこうずけのすけ）」についてお話しいたしますが、ほとんどの方は彼について知らないと思います。「歴史は勝者によって作られる」という格言がありますが、明治新政府はまさにこれを実践したからです。私は、表面的な説明にとどまらず、できる限り歴史の裏側に踏み込んで、ことの真相を明らかにしたいと考えています。

歴史から消された「小栗上野介」

新政府の最大の課題の一つは、明治維新の正当性を証明する「歴史」を作ることでした。そこで彼らは、明治新国家を作った薩摩・長州こそが正義の担い手であるとする「薩長史観」を歴史教育の中心に置いたのです。小栗もこの「薩長史観」により、「歴史から消された」人物の一人でした。現在高校の歴史の教科書は18種類ありますが、小栗の名前が出てくるのはたったの2種類です。「薩長史観」教育の影響が今でも続いているということは驚くべき事実だといえます。

2,500 石旗本の名家に生まれる

小栗上野介忠順（ただまさ）は、文政10年(1827)、2,500石の譜代名門旗本の十二代目として江戸神田駿河台に生まれました。忠順は、早熟、雄弁で幼少時は「天狗」と呼ばれ、14歳のころ播州林田藩主建部政醇（まさあつ）を訪れ、悠然とたばこをふかし、たばこ盆をたたきながら、「船を作り海外に進出すべきだ」と論じ、周囲を驚かせました。23歳で建部家の次女道子を妻に迎えましたが、大変な愛妻家だったといいます。

数々の業績と近代化への建議

その後順調に出世し、安政6年(1859)に井伊直弼に引き立てられ目付に抜擢された小栗は、日米修好通商条約の批准書交換のため、万延元年(1860)「遣米使節団」の随員に選ばれました。直弼は、正使や副使よりも監察役であった小栗に全幅の信頼を寄せたといいます。事実、当時のニューヨーク・ヘラルド紙は小栗を絶賛する記事を残しています。帰国後数々の業績を残しますが、その中で特筆に値するのが、後に日本近代産業の基礎を築くことになった横須賀製鉄所の建設です。小栗は幕府の寿命が残り少なくなっていることを知っていましたが、この製鉄所は幕府のためだけではなく「日本」のために作るのだと語っています。更に、小栗は日本近代化のために、郡県制(廃藩置県)のほか、新聞発行、郵便・電信事業、中央銀行設立、江戸横浜間の鉄道建設、ガス灯設置など数々の建議をし、これらは後にことごとく新政府によって実現されています。

「勝海舟」との確執と無念の死

小栗を語る際に勝海舟を避けて通ることはできません。小栗と海舟は、一方が浮上すると他方が沈むという関係を続け、手を携えることはありませんでした。小栗は文久2年(1862)「大海軍建設計画」を提案しますが、海舟の反対により否決され二人の確執は決定的なものになります。

明治元年(1868)、官軍が江戸城に入ったとき、金蔵が空だったので海舟に詰め寄ったところ「金は小栗が仕切っているので、小栗に聞いてくれ」と突っぱね、ここから「小栗埋蔵金伝説」が生まれたとも伝えられています。

将軍慶喜が江戸へ帰還した後、徹底抗戦を申し出たため罷免された小栗は、［将来事あらば雄飛すべく、もし事なくば前朝（ぜんちょう）の「頑民（がんみん）」となって一生を終ろう］と語り、村の若者の教育の場を作るため、上州権田村(現高崎市倉渕町権田)に隠棲（いんせい）しました。

しかし、小栗が巨額の軍用金を持ち返ったとのうわさが立ち、多数の暴徒に襲撃されました。これを撃退したことをきっかけに新政府軍に捕縛（ほばく）され、何の取り調べもないまま翌日斬首（ざんしゅ）されました。この暴挙の背後関係はよくわかっていません。

冒頭申し上げましたように、まさに「歴史は勝者によって作られる」ので、小栗は幕府の罪を一身に背負う形で謀殺されただけでなく、歴史からも抹殺されました。

「小栗上野介」の復権

一時は歴史から消えたかに見えた小栗でしたが、近年少しずつ史実が明らかになり、復権の兆しを見せています。平成14年(2002)NHKテレビが「その時歴史が動いた」で、また、翌年正月ドラマ「またも辞めたか亭主殿」で小栗を取り上げ、感動を呼びました。

平成20年(2008)には明治大学博物館で「小栗上野介企画展」が開催され、神田駿河台に「小栗上野介生誕の地」の立派な銘板が千代田区により設置されました。

これからも、もっと多くの人に小栗と彼の業績を知っていただきたいものだと思います。

レポーターからひとこと

明治新政府の思惑により、歴史から消された偉人「小栗上野介」の話に、歴史認識の難しさを感じました。

参加者166人。

【記録】文・写真：広報部会・五十島正修

第119回 江戸東京博物館友の会セミナー（平成24年7月28日）

「三猿のみた江戸 ―石造物から読み解く近世―」

講師　石神裕之さん（慶應義塾大学准教授）

江戸時代と庚申信仰

かつて日本三大庚申堂といえば、大坂天王寺、京都八坂、江戸入谷を指しましたが、残念ながら入谷は現存していません。河竹黙阿弥による歌舞伎「三人吉三廓初買」には、「大川端庚申塚の場」の一幕があります。大川端に庚申塚(堂)があったという記録はありませんが、庚申の年であった安政7年(1860)という年にあたり、黙阿弥は御嬢、和尚、御坊の三人の吉三を、庚申の主尊、青面金剛の使いとされる三猿(見ざる、聞かざる、言わざる)になぞらえ戯曲化したようです。現在、東京には都電荒川線の庚申塚駅近くに庚申堂があり、明暦の紀年銘をもつ庚申塔が納められています。また巣鴨の高岩寺(とげぬき地蔵)には庚申板碑もあって、江戸では中世以来、庚申信仰が盛んであったことがわかります。

近世石造物の一つである庚申塔は全国各地で見られるものですが、都区内では現在1,628基が確認されています。こうした庚申信仰は民間信仰の中でも、とくに全国的な広まりをみせたもので、江戸で石塔造立が盛んになるのは、17世紀後半から18世紀前半のことです。

庚申信仰の成立過程

庚申信仰が成立する背景には、道教的思想があるとされています。それは体内にいる三尸という虫が庚申の日に天に昇り、天帝に人の悪事を知らせ、命を縮めるといわれるもので、三尸の天帝への行動を抑えるために徹夜をするとされます。これが庚申待です。十干十二支の干支のなかで、なぜ庚申の日に行うのかは不明ですが、平安時代からすでに行われていました。

こうした徹宵を庚申日に三年続けると三尸は死ぬとされ、その三尸を供養する目的で建てられたのが庚申塔です。三井寺中興の祖、円珍が持ち帰ったという経典の一つに「庚申経」と呼ばれるものがあり、そのなかにこうした庚申待の方法や経文が書かれています。これを誰がどのように広めたかは、いまだ謎に包まれています。

庚申塔の主尊・かたち・施主

庚申塔の主尊となる像容で一番多いのは青面金剛です。都区内の庚申塔では57%以上を占めています。しかし都内最古の庚申塔は、元和9年(1623)銘の足立区正覚院の弥陀三尊来迎図が刻まれたものです。実は江戸前期には、さまざまな主尊を刻む例がありました。例えば三猿だけが刻まれた庚申塔も多く、山王信仰の中で猿が神の使いとされることからも、天台宗とのつながりを想定することができます。くわえて阿弥陀如来、地蔵菩薩など、庚申信仰が広まった当初は、主尊が定まっていなかったようです。江戸で青面金剛が刻まれるのは寛文元年(1661)のことで、これ以降、青面金剛が主尊として定着していきます。

石塔形態には七つの主要な類型があり、とくに板駒形とよばれるかたちが多く見られます。ただし、地域や時代によって好まれた「かたち」があったようです。そして庚申塔を建てる風習は江戸から広まっていったことが、東京近郊に残る庚申塔から推測されます。こうした庚申塔の多くは江戸石工によって造られ、地方へ送られていたようで、江戸からの距離が遠くても、河川に近く水運が盛んなところでは、古い紀年銘の石塔が見られ、早い時期に庚申塔の造立習俗が広まったようです。

庚申塔の施主は18世紀前半までは個人名が刻まれます。しかし次第に「講中」による造立が増加していきます。個人から組織へと信仰形態が変わっていったと考えることができるでしょう。

新たな石造文化へ

享保期以降、新規石塔が幕府より禁止されるなかで、道標として庚申塔を建てることが18世紀後半から増加します。信仰から実利的用途へと造立目的が変化していく背景には、信仰の希薄化があると考えられます。また江戸後期には、庚申信仰と富士信仰が習合した庚申塔も見られるようになります。

一方で芭蕉句碑や顕彰碑等が造立されるようになり、石造物造立の意義が宗教から歴史へと変化していることがうかがえます。以上のように、庚申塔は江戸時代から現在に至るまで連綿として造られてきました。そこからは信仰や近世社会の変化をいきいきと読み解くことができるのです。ぜひみなさんの力で、今後もこうした石造物を大切に守ってほしいものと思います。

レポーターからひとこと

石碑、石造物は比較的身近に残っていますが、じっくり眺める機会はほとんどありませんでした。文字を読み取るのが困難なくらい古い風雪に耐えたものには、郷愁を感じます。

博物館に保管されるもの以外でも守るべきものは多くあると感じました。

参加者は109人。

【記録】文・写真　広報部会　天野哲夫

江戸東京博物館友の会特別観覧会
（平成24年8月3日）

江戸東京博物館 開館20周年記念「二条城展」

7月29日から9月23日まで開催されている「二条城展」の友の会特別観覧会が8月3日(金)17時から開催されました。観覧に先だって、1階ホールで行われた斎藤慎一学芸員による「見どころ解説」を中心に「二条城展」をご紹介します。

二条城は、平成6年(1994)に世界遺産に登録されたこともあって、年間130万人が来場する一大観光スポットになっていますが、二条城の歴史や文化的価値についてはあまり知られていない一面もあるようです。今回の展示は、普段見られない絵画や彫刻をはじめ貴重な歴史資料によって、二条城の持つ歴史的、文化的価値を心行くまで体感できる内容と構成になっています。

現在の二条城は、慶長6年(1601)徳川家康が造営したもので、ここで慶長8年(1603)に将軍宣下の祝いが催され、江戸幕府誕生の場となりました。本来、城は戦のためのものでしたが、二条城は朝廷を敬いつつ掌握するという、幕府の力を誇示するための場所でした。三代将軍家光が後水尾天皇を迎えた壮大なイベント「二条城行幸」、室内を飾る狩野派による障壁画、華やかな時代を見つめた二条城は、くしくも「大政奉還」を見届ける徳川幕府終えんの場所にもなりました。

今回の「二条城展」は、第1章から5章のテーマ別による五つのゾーンで構成されています。第1章のテーマは、「二条城創建」。入場すると最初に出迎えてくれるのが、二条城二の丸唐門の欄間彫刻。斎藤学芸員によると、唐門は今修復中で、この彫刻はたまたま外されて保管されていたため、今回の展示がかなったもので、今後は一切間近で見る機会はなく、必見です。

第2章のテーマは、「二条城大改築」。もっとも華やかな時代の二条城の姿が私たちの目の前に広がります。わずか13歳で後水尾天皇のもとに入内された東福門院和子の像は、時代を超えて私たちに感動を与えてくれます。彩り鮮やかな「行幸図巻」と「行幸御献立絵図」も「見どころ」の一つです。

そして、今回の最大の見どころである第3章「寛永障壁画」へと進みます。二条城で唯一残された江戸初期の遺構である二条城二の丸御殿の「遠侍」「大広間」「黒書院」「白書院」に描かれた絵図や障壁画が目にも鮮やかに展示されています。中でも大広間四の間に飾られた「松鷹図」の巨松のなかで獲物を見つめる大鷹の力強い構図に居並ぶ大名たちは並々ならぬ畏敬の念を抱かされたことでしょう。

第4章と5章では、大政奉還後の「離宮時代」と「世界遺産」について紹介しています。最後に、斎藤学芸員は［(1)二条城と共に生きた時代の移り変わりを肌で感じていただきたい、(2)世界遺産を後世まで多くの人に残そうとする京都市の取り組みに共に賛意を表したい、(3)会期中、修復のための「世界遺産二条城一口城主募金」を受け付けているので一人でも多くの方のご協力をお願いしたい］と総括されました。参加者は193人。

【取材】文･写真：広報部会･五十島正修

江戸博クリップ

「日韓美術交流史をテーマに」

学芸員　朴　美姫

はじめまして、今年4月から資料係になりました朴と申します。前年度まで造形研究科大学院美術専門造形学コースの大学院生でしたので、江戸博ではいろいろ勉強させていただいているところです。専門は日本の近世美術で、特に日韓美術交流史をテーマに揚げております。修士論文では留学生という利点を生かし、日本と韓国の美術交流をテーマに揚げ、江戸幕府の将軍から朝鮮国王に贈呈された「贈朝屏風」に関する研究に取り組みました。この分野は近年、研究書が出版されたり展覧会が開催されたりと、研究が盛んになっているテーマです。反面明らかになっていない事実も多く、韓国側の文献を参考に日本では不明であった事実をいくつか確認しました。また、修士論文を通じて歴史的な時代背景を踏まえた上で主題を深め、現在韓国で確認されている2点(「苅田雁秋草図」、「牡丹流水図」韓国古宮博物館蔵)の屏風に注目し、日本側と朝鮮側それぞれの文脈からアプローチし、さらにその共通分母である中国の動向にも論究いたしました。

博士課程では、修士論文の主題をさらに発展させ、現在では時代をやや遡らせ桃山時代後期から江戸時代初期の日韓交流に焦点を絞り、新資料を得て、研究を進めております。

江戸博には入ってまだ1年もたっていないのですが、研究と仕事を両立できるように今後も努力してまいりたいと思います。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸東京博物館友の会　見学会　（平成24年6月10日）

「『江戸名所図会』を中心に江戸の面影を訪ね歩く―その1　湯島・本郷」

6月から『江戸名所図会』を中心とした史跡見学会が始まりました！『江戸名所図会』は神田の町名主だった斎藤家三代にわたって刊行された地誌で、天保5、7年(1834、36)刊行で全七巻二十冊となっています。江戸の名所旧跡、寺社、武家屋敷、商家、祭などの挿絵が多く、江戸時代当時は、旅人にとっても貴重な観光案内書であり、史誌でした。

聖橋から湯島聖堂へ

聖橋は昭和2年(1927)に完成したコンクリート造りの橋で、お茶ノ水橋、昌平橋とともに『お茶の水の三名橋』の一つです。しかし、『図会』に「聖橋」と「お茶ノ水橋」はありません。将軍家光が伊達政宗の江戸内侵入を警戒し、政宗に空濠(仙台堀)を掘らせ、橋も架けさせなかったためです。

聖橋を渡ると右手神田川沿いの小高い緑の中に湯島聖堂の入徳門が見えます。聖堂は寛永7年(1630)に幕府から与えられた上野忍ヶ岡の屋敷地に林羅山が営んだ「私塾と孔子廟」が起源です。その後、元禄3年(1690)将軍綱吉が神田湯島に、孔子廟・講堂等を移築させて聖堂と呼ぶようになりました。

神田明神から湯島へ

昌平坂から湯島坂に回ると見える鳥居には「神田神社」とありますが、通称神田明神はもと芝崎村(現大手町辺)に鎮座しており、元和2年(1616)に当地に移転してきました。江戸城表鬼門の江戸総鎮守で、一の宮の神は大己貴命、二の宮は少彦名命、三の宮は平将門。鳥居の前の街道は「門前板橋街道」(中山道)でした。

▲湯島聖堂大成殿

折しも御神殿で結婚式が執り行われ、白無垢姿の花嫁が印象的でした。境内では、幼い神馬「神幸号」が愛らしく、人々の心をひきつけます。東側裏門はがけっぷちの急階段で、そのがけは北へ続き、実盛坂や湯島天満宮の男坂からでも急階段が見られます。

妻戀明神社と霊雲寺

清水坂を上ると、間もなく右に「妻戀神社」。もとは旧湯島天神町にあり、明暦3年(1657)の大火後、当地に移りました。祭神は日本武尊。後に稲荷明神。縁起物の「木版刷りの夢枕」は正月二日、枕の下に敷いて寝るとよい夢を見るとか…。

▲霊雲寺の開山堂

「霊雲寺」は元禄4年(1691)江戸城鎮護、徳川家の武運長久の祈願所として創建された真言律宗の寺院で現在は真言宗です。本堂は昭和51年(1976)に落成した2階建で、『江戸名所図会』の本殿灌頂堂より豪壮な感じです。

景勝の地・湯島天満宮と麟祥院

さらに清水坂を上ると「湯島天満宮」。この湯島天神は正平10年(1355)に湯島の郷民が「菅原道真」を祭り、文明10年(1478)に太田道灌が再興し、家康が神領5石を寄進したそうです。ここでも白無垢姿の花嫁が見られました。

▲湯島天満宮入口

北の切通し坂・春日通りを西に進むと「麟祥院」。将軍家光の乳母春日局の隠棲所として寛永元年(1624)に創建。死後に菩提寺となり、春日局の法号「麟祥院」を号しました。「からたち寺」とも呼ばれます 。

見送り坂・見返り坂から昌清寺

本郷4丁目の菊坂は太田道灌の領地で、江戸内と外の境でした。本郷通りは、江戸追放者の見送り坂・見返り坂で知られます。そぞろ歩いてやがて 、本郷2丁目の「昌清寺」。家光の弟忠長の乳母昌清尼が開基の寺で、忠長の菩提を弔いここで没すると、高崎大信寺の忠長の傍らに葬られ、この昌清寺に分骨されています。

最後に本郷給水所公苑、東京都水道歴史館を見学。神田上水懸樋風情に思いをはせつつ、解散しました。

レポーターからひとこと

何とも「坂」の多いこと！そのためか、都心の真ん中でありながら、緑や見晴しの良い景色にも出会えます。天気も良く参加者は207人でした。

【記録】文･写真：広報部会･国定美津子

江戸名所図会を歩く…③

［於玉稲荷から吉原町旧地］

柳橋

『江戸名所図会』の楽しみのひとつは長谷川雪旦の筆になる挿絵でしょう。絵を見てあれこれ推理したり想像したり、時間があっというまにたってしまいます。同時代の戯作者滝沢馬琴は随筆『異聞雑稿』のなかで「江戸名所図会はその功、編者は四分にしてその妙は画にあり」とこの雪旦の絵を高く評価し、この絵によって遠くに住み江戸に来ることのないような婦女子にもおもしろいものになったとしています。街中のアジサイが見頃の梅雨の合間に柳原の土手からの続きを歩いてみました。

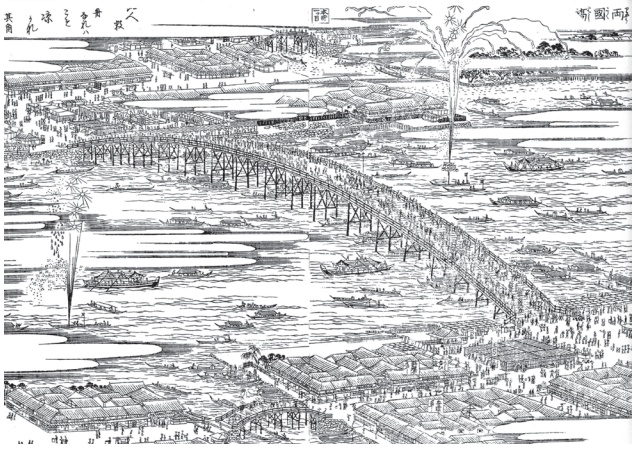
於玉稲荷から柳橋

柳原通りから岩本町に入っていきます。この辺りには旧名桜ヶ池と呼ばれる広大な池がありました。図会の頃すでに池はほぼ消滅していたようですが、二人の男に言い寄られ池に身を投げた於玉の故事に倣い、於玉の霊を慰める於玉稲荷が建てられました。今は岩本町２丁目のマンションの間にあります。於玉稲荷を過ぎて靖国通りに戻るため人形町通りを横断し、偶然弁慶橋跡の説明板を発見しました。弁慶小左衛門の名作として知られるこの橋は藍染川の埋め立てで明治18年(1885)に廃されました。しかし明治22年(1889)に橋の廃材を利用して清水谷から赤坂見附へ出るところに弁慶橋として架設され、明治大正期の名所になったとあります。藍染川の痕跡はみつけられませんでしたが、二つの弁慶橋の名の由来がここで合致したのは意外でなんだかうれしくなりました。

靖国通りに出ると浅草橋はもうすぐ。浅草見附跡の碑や、南詰め交番の脇に郡代屋敷跡の説明板があり、神田川沿いに船宿の風情ある小道を行けばまもなく緑色の柳橋がみえてきます。緑の橋の欄干の飾りはかんざし、眼下に赤い屋形船。大川への入り口の風景は鮮やかな色の対比が印象的です。

両国橋から椙森稲荷

柳橋を渡ってかつての両国広小路にでると、今は靖国通りとなったその中間の緑地に、広小路を説明したりっぱな石碑があります。両国橋は


▲長谷川雪旦　両国橋（部分）

武蔵と下総の国境に架けられたため両国橋と名付けられましたが、図会の頃には利根川が境とされ、本所の地も武蔵国に属していました。しかし、橋の名前はそのままに残されました。図会には夏のこの辺りのにぎわいが美文でつづられています。

この人数　船なればこそ
涼みかな　　其角

挿絵の両国橋はまさに其角の句のとおりのにぎわい。よく見ると橋の真ん中に小さく番所があるのがわかります。

両国橋から薬研堀不動を経て新材木町(現日本橋堀留町１丁目)の杉森稲荷社(現椙森神社)へ向かってみましょう。江戸城下の三森(烏森、柳森、椙森)の一つに数えられ、庶民の信仰を集めたとあります。また、火災の多かった江戸での寺社再建費用のためにここでも富興行が行われ、人々に親しまれていました。大きな富塚の碑が鳥居脇に建てられています。堀留町から人形町は目と鼻の先。次は江戸歌舞伎発祥の地です。

歌舞伎芝居

「中村勘三郎官府の免許をえて江戸中橋に於いてはじめて太鼓櫓をあげ、猿若狂言づくしを興行す」江戸中橋とは現中央区京橋１丁目あたり。これが慶安４年(1651)葺屋町、堺町と呼ばれた現日本橋人形町３丁目辺りに移り、江戸大歌舞伎発祥の地とされています。歌舞伎の中村座、市村座のほかにも操座、木偶芝居などがあって、たいそうにぎわっていたようです。人形町交差点北側を少し過ぎた辺りに昨年立てられた説明板があります。通りを挟んで向かい側ドラッグストア前には史蹟玄冶店の碑。歌舞伎「与話情浮名横櫛」の源氏店のモデルとなった場所です。お芝居では鎌倉雪の下ということになっていますが、この玄冶店が歌舞伎発祥の地のそばであったためにあの有名な場面が設定されたのかと勝手に得心。

吉原町旧地

歌舞伎発祥の地の人形町通り向かい側のエリアは和泉町、高砂町、住吉町、難波町などとよばれ、吉原の旧地でした。今でいうと南北は富沢稲荷と末広神社の通りの間、東西は人形町通りと久松警察(浜町堀跡)の間くらいです。末広神社はこのあたりの産土神ということで、吉原旧地に関する説明板もありました。旧地の真ん中に大門通りがあり、今でもその名が残っています。大門は北端となる富沢神社の前の通りにあったようですが、なんの痕跡もありません。40年近く営業した吉原は明暦３年(1657)の大火で焼失し、元吉原の地をひきはらって浅草の北に移っていきました。

【取材】歩いた人(文・写真)：
広報部会・中村貞子

催事案内

古文書講座

9月から第２期を開講

すでに申込は締め切っておりますが、9月から下記日程で開講します。

◆入門編
- 講師：田中潤さん(学習院大学文学部史学科助教・史学博士)
- 開催日：9/5(水)、10/3(水)、11/7(水)

◆初級編
- 講師：吉成香澄さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：9/19(水)、10/17(水)、11/28(水)

◆中級編
- 講師：長坂良宏さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：**9/15(土)**、10/13(土)、11/17〈土)

＊9/15(土)は、午前だけの開講(合同講義です)

- 時間：各講座とも 午前の講座は10時30分～12時30分
  午後の講座は14時～16時
- 会場：各講座とも江戸博1階会議室または学習室1,2
- 参加費：各講座とも全3回1,500円(初回一括払い)

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

友の会特別観覧会

●江戸東京博物館 開館 20 周年記念特別展「維新の洋画家一川村清雄」

◆日本近代洋画の先駆者であり幕末から昭和の時代を生き、洋画の世界に江戸文化を融合させた独特の画風の洋画家・川村清雄の画業と生涯を、作品と豊富な歴史資料で紹介する特別展です。担当の落合則子学芸員による「見どころ解説」をお願いしていますので、ご期待ください。

- 開催日：10月12日(金)17時～19時
- 申込締切：10月1日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール／1階展示室
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者700円(当日払い)

【企画担当責任者】松原良(事業部会)

友の会セミナー

第 121 回「彰義隊の墓守の子がみた―上野戦争と上野公園―」

講師　小川潔さん(農学博士)

◆上野公園は、誰もが知っている東京の顔、しかしその素顔やそこに繰り広げられた人々のドラマは、ほとんど知られずに忘れられています。彰義隊の墓守の子として上野公園で生まれ育ち、長く野外観察会のフィールドワークを続けてきた視点から、上野戦争と小川家の人々、現代までの上野公園の変遷、来訪者のいろいろをつなげて、もう一つの上野公園を紹介していただきます。

○講師略歴：おがわ・きよし
昭和22年(1947)、東京都台東区上野公園生まれ。東京大学理学部生物学科卒業。大学院理学系研究科植物学専門課程博士課程単位取得退学。昭和54年(1979)より東京学芸大学教育学部勤務。平成24年(2012)3月定年退職、4月特任教授(非常勤)となる。著書は『新版上野のお山を読む』(共編著、谷根千工房)、『自然保護教育論』(共編著、筑波書房)など。

- 開催日時：9月29日(土)14時～15時30分
- 申込締切：9月20日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】国定美津子(事業部会)

第 122 回「坂本龍馬と刀剣―龍馬を斬った刀」

講師　小美濃清明さん(幕末史研究家)

◆坂本龍馬は日本刀について専門的な知識をもっていました。それを、龍馬が書いた手紙から検証していき、さらに日本刀を通じて岩崎弥太郎と龍馬の関係を推定していきます。そして、龍馬暗殺の現場で刺客が使用した刀を史料から推定して、暗殺の瞬間を再現してみていただきます。

○講師略歴：おみの・きよはる
昭和18年(1943)生まれ(68歳)。東京都在住。父が刀剣研磨師。早稲田大学卒業。作家。『坂本龍馬全集』を編集・解説した宮地佐一郎氏に師事して、龍馬研究に入る。日本刀については、宮内庁御物御剣掛・吉川賢太郎氏に師事して日本刀史を研究する。「幕末史研究会」を毎月1回開催して、今年8月で第200回を迎えた。著書は『坂本龍馬と刀剣』(新人物往来社)、『龍馬八十八話』(右文書院)など

・開催日時：10月27日(土)14時～15時30分
・申込締切：10月18日(木)必着
・会場：江戸東京博物館・1階ホール
・定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
・参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】国定美津子(事業部会)

第 123 回　「子孫が語る家康六男忠輝の末裔 松平忠敏の幕末史」

講師　松平康夫さん(江東区文化財保護審議会会長)

◆父家康の勘気にふれ改易(かいえき)となった悲劇(ひげき)の大名六男松平忠輝。200余年の歳月を経て忠輝の末裔忠敏は、配流の地信州諏訪の遺臣たちのお家再興悲願を胸に秘め、松平春嶽、勝海舟、山岡鉄太郎たちの知遇を得て幕府立て直しを画策、表高家衆という家格をもって、清河八郎とともに有能な浪士取立ての実現を目ざして奔走、新選組・新徴組誕生の基を作ります。今回、新たな史料発掘を得たのを機に、その知られざる生涯と事績を、動乱の幕末・維新史の一画に位置づけて紹介していただきます。

○講師略歴：まつだいら・やすお
昭和15年(1940)東京都生まれ。早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了。東京都公文書館で東京市史稿・都史紀要(近現代担当)の編さんに30年間従事。課長補佐、東京福祉大学教授、江戸東京博物館資料収蔵委員会委員などを経て、現在は小金井市史編さん委員・江東区文化財保護審議会委員。著書は『都史紀要31東京の水売り』(東京都)、共著は『江戸東京学事典』(三省堂)など多数。

- 開催日時：11月10日(土)14時～15時30分
- 申込締切：11月1日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】小林弘明(事業部会)

見学会

「再訪　江戸城周辺の探訪―その３（外濠）」

◆江戸城周辺の再探訪シリーズの3回目です。江戸城外濠は国指定の史跡です。江戸城外郭を東西約5.5㎞、南北約3.5㎞の楕円形で囲み、いかなる敵をも寄せ付けない巨大な要塞です。この外濠は絶大な権力をもつ江戸幕府の天下普請により、江戸城総構え工事として完成されました。今回もその外濠に沿って、御茶ノ水～牛込門～市ヶ谷門までを散策し、その周辺に残る遺跡・遺構を探訪し、江戸城外濠の壮大さと歴史をしのびます。所要時間は約４時間、JR 中央・総武線、東京メトロ有楽町線・南北線および都営地下鉄新宿線「市ヶ谷」駅で解散となります。

- 開催日：9月30日(日)12時45分集合。
  集まり次第、時間前でも順次出発します。
- 集合場所：JR 中央・総武線「御茶ノ水」駅聖橋口
- 申込締切：9月20日(木)必着
- 定　員：150人、同伴可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】大澤憲一・山本隆・(事業部会)

「日光東照宮および周辺見学」（バスツアー）

◆今年は、日光山内をめぐるバス(はとバス)の旅を企画しました。日光山内とは東照宮、日光輪王寺(徳川三代家光廟の大猷院を含む)、二荒山神社の2社1寺のことです。いずれも現地ガイドがつきます。五重塔の内部も特別に拝観できるとのことですので、奮ってご参加ください。帰着は江戸博に18時30分ごろの予定です。

- 開催日：10月5日(金)7時30分集合、8時出発
- 集合場所：江戸博北側入口　レストラン前
- 申込締切：9月10日(月)必着
- 定員：120人(バス3台)　同伴者1人可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)、申込多数の場合は抽選
- 参加費：会員7,000円(拝観料1,470円、昼食代1,575円、ガイド料込み)、同伴者7,500円(同)。参加費は前納(参加申込者に振込先と期限を通知します)。

【企画担当責任者】西村英夫・宮　俊(事業部会)

会員優待のお知らせ

好評開催中！

●江戸東京博物館 開館20周年記念

「二条城展」

会　期　7月28日(土)～9月23日(日)
休館日：毎週月曜日、ただし9月10日、17日は開館
会　員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円
　＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。

次回予告

●江戸東京博物館 開館20周年記念特別展

「維新の洋画家―川村清雄」

会　期　10月8日(月・祝)～12月2日(日)
休館日：毎週月曜日、ただし10月8日は開館、10月9日(火)は休館
会　員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円
　＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。

●(注)両展とも割引を受けられる同伴者は1人だけです。

企画展のご案内

●企画展 「市民からのおくりもの2012」

会　期　8月7日(火)～9月23日(日)
休館日：毎週月曜日、ただし9月10日、17日は開館
会　場　常設展示室5階　第2企画展示室

●次回企画展 「徳川家康の肖像（すがた）―江戸時代の人々の家康観―」

会　期　10月6日(土)～11月25日(日)
休館日：毎週月曜日、ただし10月8日は開館、10月9日(火)は休館
会　場　常設展示室5階　第2企画展示室

お申込方法

＊「えどはくカルチャー」など江戸博への申込と違い、普通はがきで宛先も「友の会事務局」と明記ください。お間違いなく！

◆**普通はがき**に、①催事名(略名可)・開催日、②会員番号、③氏名(同伴者連記)を明記して下記の「友の会事務局」へ。**「往復はがき」の必要はありません。**なお、見学会に限り傷害保険の関係で同伴者の氏名、郵便番号、住所、電話番号も書いてください。
◆締切：各催事の案内をご覧ください。
◆申込は、各催事ごとに会員１人１通。
◆友の会へのご意見・ご要望があればご記入ください。

◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網 1-4-1
　江戸東京博物館友の会事務局
＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。
　なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。
＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります**。
＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などは事務局員出勤の**火曜日か金曜日(10 時～12 時、13 時～17 時)**にお願いいたします。
＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会報＜**えど友**＞第 69 号
平成 24 年 9 月 1 日発行（奇数月 1 日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

編集長兼発行人：松原良(会長)　副編集長：菅沼和男
編集人：佐藤幸彦、深尾恵美子、福島信一、内匠屋京子、中村貞子、佐藤美代子、国定美津子、天野哲夫、前田太門、五十島正修、菊池真一、竹中裕見子
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網 1-4-1　電話 03-3626-9910